傳春集

863
154

国立国会図書館　タイトル『伝春集』 請求記号 863-154

ガラス使用

八六三一一五四

序

春は[illegible]の[illegible]桜の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　　タイトル『伝春集』　請求記号 863-154

ガラス使用

序

いはんやはなのもとにこそあれとの
たまひし御心のほとりにも尋ぬ等
ふみのうちにものゝはへ
にほふなるよりもなほはふ
みちをく一万貫も南無阿弥陀
佛と回向したてまつりぬ

天保十五甲辰の春
嵐山□史篆

辞世

雲煙一睡の中に過る
さらはなきさきすみかし
おもひやるこゝろぬるり
そのゆふへおもひやつゝ

梅僊居士

命もつきぬへき時に臨みて
とのたまひし大吉様を出てへきしと
まもなく社中のおもひ一同百韻の
かうそとせしぬそ伝春集となつけて
社中の人に贈る伝へその小祥忌に
手向るとて手向のことつゝぬ

男
紫魚謹誌

帝國圖書館藏

国立国会図書館　タイトル『伝春集』　請求記号 863-154
ガラス使用

天保十五年甲辰三月三日小祥忌

追善俳諧之連句

いさ花と音なくきえし古巣かな　居士

四方の梢の眼にしみる春　魚奥

屋根ふける箕はわらのもれて吹く　丈象

たくみ降りて哇し声で行く　暁雨

綱をのまぬ小牛繋げば　蕉白

あふかに隠して誰る水　空雨

節造ひの月のはしけ処秋になり　禾明

棹れてり嵐のあらしくやまぬ　庄松

え和ウ寺にはいりて雪の隠れ処　柳絲

雨簟にうちふきやらうまき　藍水

竿ゆて泥をあて転く小ちるまん　花渓

なられます身は泉野かたへ　蛙水

芦葉を噛みて侵れつきはし　蘇萊

ともかく度を旅ひ　庵谿　藍湖

味噌つく家の日和とりよく定まりて　里扇
ふとき大根と杵つ音る　月　梅斜
うれしさうに鞁ま作るゝ咲み出し　傍家
暮前行かぬ下り坂とてゆるゝ　響角
清りさけく墨そて探ひる馬提灯　虚仙
髪ほそしさらさ居ひ温泉の宿　花生
志ら梅は洗ひあらする白ひまで　如松
鶯菜つむ　落花　芽ぶく川　蛙仙

る落花よき香りさ鈴の参らそめ　子篤
投げらるゝは堀ゑとの旭　梓山
たつ崎うふ石垣ふして鉄を拾集め　似特
旅山伏の日よりもよけ合ふ　山蓼
まり谷の響盃小袖出来上り　とみ女
隣と内をぬきさなくれ出　笙峰
志らりらり戸開乳の菓の札をうけ　逸路
毎の洗ひらひ出づる豆腐屋　芦風

ちよ川ミしと地震まれの咲出しそうす　一雨
別きぬ月剃刀こそれはり鬘　梅吾
かく察れ盤お旅も過つ乗り　雅蕉
捨れ君ゞつ　手能い気ら湧く　文丈
むかやかに苺の香れある宵の月　如柳
つゝまれとゝせを　悼うる花ふ　三松女
ニウ
䂭礪流れるくふゑろ手を鎬　朗風
角　花　花御の長い兀鞘　巻尺

跳おちし了代　咲ちそを引よく　芳水
みふせらしをそ　納まけとふく　冨川
口軽ふあめのひとそら宝扇　うてま　杜涼
空豆うんそを　かそ紀ら和ゑと子は　一瞻
あらくくと浮世小路の月御く　等昭
お花れ戸しゑら　おとのやぞ　丈竹
冷ふそしそを　鴫御と捨ふちるそ　松柔
筵く　ぬくふ地黄ありれ　そくま　如明

国立国会図書館　タイトル『伝春集』　請求記号 863-154
ガラス使用

ましなひも施れられ流れけり　如蓮

雛孫やえんをさし乳癒る　梅史

を卿の菜あその梢れち多して　金菜

雛子なそくと夜とをかり　執筆　仙歩

右一順

枯魚堂徒

各追悼

若くたび忘れぬ梅の宣ふ雛　盈水

一枝も去年の手向やうえんの巻　花渓

おもふ事やちりても残れ庭明く　鶴沖

曳鶴の志れあと仰し孤庭　盈洲

兔ゐる日やおそへく花の雫かな　暁雨

草の戸も朱鳥なくして茶の奏　響角

拾ひ見つゝ身にしみて桜狩　空雨

はふかくもぬとやまかりく　金菜

乞食もありけりつらし花の雲　一雨

思ひ出す笑北白ひや春の雨　等峰

名をもしらぬ蕗る梅木の桜かな　文丈

珠数をつまて水仙の匂ふかな　鬼年

竹にかくいつつく花さくらかな　似鶴

人の心へ桜もつれて二日か　歎雲

志北宮へも花と見るや鳥来　霞仙

閼伽の井に梅もる花も手向かな　梅斜

行くらせき佛のつえ北白ひかり　子登

根を喚きく人にも山さかり　秋夕

あれ侍よ行わかと見に花やかな　梓山

時雨まて眠むきのかけ花の影　とみ女

影さへく向ふ小窓やうめの月　きぬ女

何か新とおもへも佛し枯尾花　弘人

まだ新き袖ぬらしもるや一巡り　如蓮

花代さへふみぬや花の影法師　蘿心

粥る味あとあつうしや茶のけむ　禾明

香にゆるまえあかるし花の雲　朗風

見し世のをとうちらく飛し茶の烟　撲田

ゆくりなく孫も二月よ梅の盛　住楳

生れ先に経よむ宿やもちの汁　仙安

としは比につきまとひし伴仙翁北
小祥忌を弔ひまゐらせて

あひ見ふ文ぞ尚るしくや花の雲　篤明

花見る堂も今は諺しとぞさみしさよ　可侯

幻のうちらくなつかし茶の煙　如杉

散るとし花みを惜しむ心かな　逸路

花ちくなへとやもうしく茶こえとり　指月

思ひいつもそ眼にしみなか烟の下哉　栗居

石

仝如月十八日於忍岡精舎

追善俳諧之連歌

居士

解る降る雪もはかなき春の雨　梅人

むせふ迄かりに今朝に梅か香　兎流

別れ行余波とゝまる山越て　兎渓

うち寄る花ぞ戀にまさる哉は　岑木

新米の初刈あかる宵の月　十竹

木とり使の馬帰る川

ふきおろす松風さむき秋の暮　吉恒

時雨ぬ花も萩へ移るやら　大淵

えん側をふつつりすねて一造作　禹梅

たらもれうし紀状の手控し　言樹

大磯のかしいまてる市仲士　拵大

うれ鳥の何思ひ見えそつ　如猿

しほ流に菊る千葉の月寒く　茨峰

東ゆし沖の船手て太漕く　玉家

湖を安国は橋ゝゝ川ふ架り　立れ

ゝ川拾ひのしけか遠浦原　其仙

隣有陸野を餘さぬ花さかり　可楽

志さ連らへゝゝゝ陽炎のゝ津　梅仙

右一順

揖竜堂　梅窓堂徒

手向各句文略

かすみ日は花有と蓋ゝゝ家ゝふ　亀渓

使のみちゝまかる使ゝらゝゝ車　十明

古ふ水ゝ芳おもひ出されて山た含　甚儒

おもひ出次を深と志のふや届は寺　安本

夕寒ゝこゝゝらぬ色はとゝふ暮　大淵

流を冲く浮ゝ筏浮て来は水　如猿

揉ゝ香や枝ゝ折とゝゝゝれ後　高樹

見ゝるゝらゝゝ宿ゝ日のゝ蝶は中　息涯

りんのあとに明れつくりかゝるに　淡悴

そよくれと見し匂ひを梅の花ちらす　去頑

見廻すと咲かされさぬ若柳に　角梅

ちれ匂ひ移りてふうし塚の華　玉秀

人とし和紙文ふしむ花のちらくれ　壽水

咲みちて花やとしめと眉のうか　柳川

山吹を見もとのあしそ老れる　古笑

朝うつのとやつきれるは楼の接　梅人

仝　於浪花香福寺興行

追善俳諧之連歌

楚と櫻くと人に思ひそつらぬるを　居士

みるくる昧なり見つらぬを床さき　風至

塗画は揺すり花庭を菊ほうる　抑欽

ぬ深く袋いふに若れ咲そく那り　里風

見つきうれ雲へ汲さは濱の月　玉趾

消さとれ村示夢つらぬ秋結　風集

君が川を急ぐ稲よ子稲干すかな　湖友

先うら陰りし夕日の入りかな　鳳路

法師に逢ふてみらてらに桜もえ　梅水

お月も啼ける山の寺の子　如鳳

はつ雪に倚る笠もぬぎて咲し合　梧栞

咲すさる花の散り波のこゑす　旭鳳

春雨し夕月の夏凌り　雅友

此やくるゝ小田の桂書　鳳児

梅ちるや鶯のゆめの辺のつま　梅仙

かすみし鐘のかすみ哉　夕鳳

何事に花の木陰の夢を掃　山鳳

春の我覚え掃洛の笑　其鳳

右一順

飯之浦　梧桐庵徒

捻香

三年経し花の盛りを惜しみけり　梧桐庵　鳳闌

文音追悼各吟略

出る屋にはしのぶ時しも花の名残　石見　青地

名は茶のうつりて散さくら哉　一拙

ちる花は聞てかなしき涸うき　蘭谿

時ならぬ雲とさそふや花の雪　紀伊　涼志

聴くとも夢は行しくやちりて後の錦　宋斗

夜の雨見とや何と見よとや夕ぐもり　白江

無手折のしるし樹の若葉や啼蛙　浪花　丈游

月影にしもしめしむ夜の夢　河内　雪象

散る花は行きつるる月夜哉　松桂

惜しさや無常は時のとゝのはぬ　近江　房路

あはれなり蛉の飛し秋のくれ　梅暁

斧音も絶てしつかなりし　松乾

茶をさるや是非庵桜は禄の上　笙堂

最後まで終りやまた手向けし水の泡　布帆

桃の日のつくも雫や露一しづく　泉石

生涯をはかりそめにて送り得 勘二

ちらさなば花の夕ぐれかな 麿ち

さき梅花ちれて日のさし添雨の朝 山紅

散る花に珠数くりかへすや衣 乙合

はるゝ雨や夫婦もあれて苔櫻哉 玉庵

梅が香に風のみやしのびより 律風

おもふ蓮の下かげ風にかをり 鳳吟

草さまんと野をかけ出る孫かな 苍庵

菜の露もなくて傾城が前の絆 丹波 東洋

降りかくとしも夕ぐれや苔櫻 [?] 五川

小雲はゆく影を麗し散さくら 摂 内海女

梳のけりて香はふし梅の鈴 胖曲

うるはしの香や雫の匂ひて濡る袖 江戸 祇煕

ちらす花見て君に添ひし波か朝 伊勢 千秋

花見ん後とうたゝや我等が一煙 宗跨

名がたを慕ふて入るぬ雲もあり 夕来

春雨やひらけしの足と見えけり　尾張　鶴叟

こ様へもとをりし足ふみや茶の花　若雅

右

辞世

露けしや去年の歌悦をくりしらん　梅價三女　と浪子

冬の夜は床に消炭なりし古人の言にくらべ
言ひ出して時をつくれどなるさえぬ味に
まかふや露るにはつ秋の露と消るる我ともえて

ふゝらや眠たんする月はさえてり　柔奥

簇をむすびし女方のもとへゆく
たのしさこそ

初こゑぞう木の花月より咲くらん　白花女

折ほ枝ありふみさらうるや草の花　麦雨

名月のたふ宮をとちあふ浜のつゆ　忌浜

浜はなくあられ消しや字の上　貞米

浜見ゆる志とるし萩やまくる飛ぶ　寿光

右

ひとしきり窓や月出し松の影　若狭　草盞

秋かなし波のこゝろ見れ后瀬山

文音四季混雜

盥ゆくるとも秋に蘇生れ七日　梅宝

木のはちる下張弓掛て柿もみぢ　杜鸞

七夕や雲つゝく流や風つり　九起

行ゆきよる峰ふくしさる紅の雲　宗丈

きさらぎや菜の上ゆく車かし　鳥公

蓮池や網をぬらふ波帰る　梅石

紫すり那山ありくと秋の雨　淡言

稲妻や稲中見らる山の塔　木容

とんぼうや宙にむらさきの保　松丞

大部や寺と在所の稲むし見　了良

操くらふ水まつく萩の一こゝれ　東外

綿かけて鶯見て転ろや蜂のそら　鐵年

條々に紀宮中梅の香んこう妙
柳絲

折々梅も咲かすかに折る梅ならに
如招

葉之くすふ さくら 蒲やなき秋
里扇

戸極ミけりく内へ清水をと嗅ひなり
濃雪

見よよ初しふ門あるゝ行る牡丹哉
蒼生

月下かる 衣もと蓬出清や梅の花
蛙仙

錦にるれし旭居るや春の月
馨蒜

梅折さ行まとゝ流れ都白にふ
蛙水

捨山しまりて揺下しれ明るす
梅屋

まあかる紀きけの余花や后の月
風光

揺下ふまと盛ら空なり霞の音
芳英

故郷誠しふ田ミ影やうる彼岸花
雨柔

九輪ミ年見えたる有月の東山
苓涼

館下ミかまつる月のあしきれ
杜蓼

たゞ笑ふつゝてあへるや茶松奥
枝月

そこ花や打鳴されぬそらくまり
春草

夕暮や寒くなりにむしの声　宥我

縫られて戯もせぬや案れ笠　庭柯

栗おちる気色あり添て山　山蓼

明るより枯く二本の芒哉　梅史

さみだれや築出したる雲れ行し　新蕉

山寺の鐘くるまで込む木の葉哉　梅若

撫子も川強くも淋しや観魚哉　孫月

人の間や秋の名早見なくも見えずなり　武諺

宝の杖内職に折るしも寄乙の杖　梅峰

冬川汐や根まで松の根もとまで　敬可

波がもの花よ鶯ぬ浮ひ鰍　重恭

吹きおろすあとの雲より秋の風　出山

垣をせぬ人は見さよしそうがらし　洛夕

名もしれのまつもともさる蕪かな　松雨

日の面へよりの花もりしたかなしき墓哉　百仙

隣まで行て見ても人の秋の暮　琴亭

よ川や蝶やちらく水の音しかと　華生

馬の洞に念を入れたる秋の風　湖月

うつむきと追うて面白き川筋かな　夏汀

竹の節入れぬるともみちかり[illegible]　湖風

山寺の庭の…見えける蔵の奥　陸奥

捨られて夜を…しふる花すゝき　三芳

夜の月ひとつ宿の見えたる提灯の　栄静

吹風に手の…草の花　赤峰

茶のこや総いもう子苗ら子　菊陀

投竹や…ありを…山の宮　柳水

名月を行かへりする山の宮　梢蘿

稲かりや…　亀洞

名…雨の姉妹　乙雅

魚かるゝ…秋の露　笑霍

鳴の鼻の…月夜　成之

笠着ても…潜しの網や雪の…　南淙

麦干すく新とつくんにうえの峯　聡池

月影とたゝやしむ茶の戸口の中　尭見

藪陰や出入も日々くゝ蓼の川ばら　千夕

志四角に時雨ふりけりや窓の下　寿亭

うし追の声ふきて行しや花桜　巴江

はしり込まし旭のしらる菜畑のうら　孤柳

言経てまぞり

たゞ涼や倚松の蔭しらぬ子桜の嫁　有節

月出る峯の杉影やあらし山　嵯峨　松条

足音も路へのにほや冬の月　留川

探る紀行路もある千代に来む　如明

捨鋼の牛ねぐら近き木の葉かれ　大竹

うつろふと月も出て有夕時雨　一揺

一葉ちる月とゝまらし茸の家　仙樵

志ひらひらく咲見るや納豆汁　杜涼

実のなくてすゑにまき林し蓮の堂　芳水

国立国会図書館　タイトル『伝春集』請求記号 863-154
ガラス使用

とれ忘るゝ憩ふ菊見られ　江戸　風朗

隣の芒まで妙さ咲く萩か露　梅笠

立秋や眼のゆくかたふると流し　伯遠

水底し縄のうちらや节乃角　菜静

三日月や片側は田も作る節　呂川

出行し舟のとらや夕まくれ　大招

雲や果ぶりふきや出し萩おらけ　今吟

朝霧や鶉の尾のそえそろひ　風弁

初夢のまゝしさん女をおもひられ　一具

さ紀捨れ古柴のさけく露の葉　惟草

竹秋の針あらくと時雨をり　う貌良

草も樹ゝて伸々明ゆの猪寒かな　栄英

出遠入の荷鞍すさみ掛られ　夷則

雲れ蔵早をもつくらぬ河寄哉　三草

湖くにらも中月すゑれそ子紀　緑帰

あらくもより二人おちゝし流し向ひ　申誓

国立国会図書館　タイトル『伝春集』　請求記号 863-154

ガラス使用

ふく雪のむめ咲るうらつゝ郷　得蕪

ゆとり紙あかに盗みぬ清水かな　巣鶴

是いとゞの別当も持つ浅草の庵　柔菓

曳鳥らくのはく雨も挫る小松かな　逸渕

ゆらの目野中より出ようありのあの月　山外

あかつゆくやえるやうにもしやうかな　太良彦

花ざかり今すふのくれかゝる庭の松　鼎且

須の樹より雪をひぬりの和泉山　具外

今宵く花の月清くうかつさて　呈球

水をれをゆきりもいふ秋の暮　荷兮

雪を秋の暮のふけり蕗の秋梅　護物

一里ほどまり出るの夜は行けり梅うれ　摂津 淡叟

来てありし済くふるや縮の雪　林曹

資ふるる日御もしくら浪小結浪　其山

風ありふゝ村水ふ新おく柳しくら郷　賎兄

さや／＼とのほる峠やあさ花咲　白雀女

小筏にのりて舟頭とふたりや操るゆくゑ　白路

うくひすや落てしぬるてゆく春の露　万吉人

花に病ともなくしていつうら手哉　奈日

山陰かるかろに揺てる空の若葉　其檪

水先に新花かやつく香蕪かな　一夢

下り坂にかゝりて椿やなれのつゆ　兎濤

夜もすからのけふく立居桐一葉　冬岐

ふるみえ法味や吹きる肉宮花水　紫仝

紋しるや夜あらの月蔵をこえてみ　太乙

夜あけくれ未明るなりとひ着り　退歩

雪や笠ともうちたんす春のなり　曲阜

咲きおりし法へよ菊花床てなりなし　一東

行暮り酒をまくうつれ冬さかな　知風

河ちかき川隅ていはしやうぬ帰　大年

なくさけもて撹えてもしぬ芦の伊ま　拙宝

ちる柳や吹ちらむとふらふら来る　梅氏

小一丈ほど伸ひてそ折るや雲の傘　子璞

ふくら雀も見えぬ月夜や花の中　素丘

都の宿や竹引よせて見る蟇　鼎左

伊賀
梅香の小屋のかきのみやく茶の匂ひ　松雪子

三河の住雲の夜より入る山のかね　蒼枇女

柳まとへ行くしのふくそ為けり　蠟石

三河
澤蟹の足ぬらす影や立ちみなへし　余池

吹れ来る木の葉まつかるちくらかな　石采

さらはけと松よ見えて月の客　水竹

尾張
葉ちるり湖の行くるもや菊の葉　雨后

一面にてらす梅雪の山の月　一清

竹植や大竹原の捨あらし　金英

西月や人影しらぬ名月夜　月庭

名月と志きハせぬら居て曇　加賀　探江

ゆらくと風に袖を吹落す葉の秋　素玉

花木槿絶えず人と居れば社　柿壺

葉の上ハ事なきせの家の玉　賀水

あさ顔も洞む出来のもうり形　丹嶺

此川の明く秋を立つ篠の奥　修雲

蔭を追つて川を隔の夜空ら哉　嘗呼

江の水に乱るる流つゝ空を帯　大发

蝶ありや吐息つゝ辷の笠ら山　伊勢　長白

人の心ゆくハ比もく居る茶扇哉　靄浪

下着を出しおもしろき牡丹の程　以之坊

亍涸にまかせけるえすうはみ空　流芳

若草やはましみよ鳥の鉢　松波梓

紙に露をおく来より女郎花　桐一

呼ひしく野菊を流うた田の壁　梅暁

朝顔の庭よみしもう　初松息　文外

国立国会図書館　タイトル『伝春集』 請求記号 863-154

ガラス使用

跡より先へ出る川や月の影　織芦

川浪よふる夕風や雲のつら杯　石鼎

清さしとほときて鶯れ初音かな　子遷

花に雲に吹き掛くの里に女哉　伸兎

露かゝる月の夕ぞとあつ蝶　一幽

宵ふと那らぬ咲けるれ子禁かな　越后　春宝

人よりも下折し市の浮れめ哉　宗弘

袷より吹きぬく風の緑若葉より　出羽　湖風

草の中掛けしくるてくとなし秋の声　清節

すゝ花遠く夕陽の涼しける扇　雪貢

唐の茶汲して下りるや山の人　其桃

水や中伊利の下り細原の岬　寳雪

咲かるゝとはるゝもみちかな　月戸

志かし汲く出くらの扇哉　府口

芦の穂かる音かくとよふ沢鯰かな　二紫

掌るやら英業なゝへしゝ六の客　近江　壺山

蜘のけ見ゟ小花や石蕗の葉　花渓

白梅や小寺の寺のおゝし海　鳳眉

雲雀ふ雨音もしけ来の事　豊谷

磯の水も滴るに青ぬけ所　雨様

月の影さ二人すゝみに笠を柳　井蛙

出る客の耳に宗れぬ宿の梅　嘯月

早そ生さる植るあくかうし草の露　萱逸

燕の返るやうやきはのゝ山かな　枕谷

葉ハ戸や露をも光る秋の星　梅泉

藻小桜ちり住うへて亟ま多り　半月

水桶すゝ和して戻る一葉哉　鬼章

来かへさ出て後手ゝの切籠哉　可月

夕霧やさらぬるやしふ日の影　而集

古川ゝ先をしたゝ東雲や今の雪　豊竹

見えも出る月ふ白さゝかま光ゝ宗　米友

国立国会図書館　タイトル『伝春集』　請求記号 863-154

ガラス使用

鶉小成く鶉の声に成喰ふこゑ哉　芋丈

日に成て雁くおもと花咲と思ひけり　松柏

大雪に成て持つ春たのしや雪の朝　雲玉

ゆかしえの家をおかさんは墓参り　茄罷

鶯鳴や岡に白ひ枝青成さけ　家广呂

さう拙なるくる葉まさる牡丹哉　一石

黄昏やあとふぬ雨にさくらへ来る　寸斗

風の日とてうら波は水にう趣　千旅旋

うるひきの足なし出世為り目に車　栄花

春寸つとて一枝おりし野梅かな　素背

ふ得つる人をとよの雨は湖の月　薫葉

折る人の踏くさぬや梅の花　嘯学

ころ人の香や思ひきて露ともりつ霞　鳳舎

語のふると雨に来るや菊の花　蝶宍

憾うき文とぞ伐やも縄のきん　梅窓

雪の上ちらる影あり月の雪　鶯洲

鶯や雲にかくるゝ北の門　可松
舟路のはし鳥と定まし蕨　月坡
咲来るとまつひらけ初の花見かな　年元
ふりくらう霞る程て柿房蕎　知足
建ならし町の氣をとめく柳かな　青橋
引こゝ彩のむ迄まして和鳥　楓下
珍らしくたおもし梅の匂かな　碩山
北原の宮から来るくうらかな　奈良　重範
慇勤に焼くめら紅葉かな　大和　奇算
つ春の雅山とせうりわかくさ次　磐旋
今宵つき望月をゝつする　河内　古鏡
風のふち崩ちらきりうみの悩　松眉
奈良作り牡丹とさ流や営の種　梅操
木はもひらく咲初末洗ひ　指月
川く出つとうらむやまくうま中　紀伊　吾竹
呼うらへあからさまなる牧遣りけれ　馬勃

ちり雲はとふく捨る出し来らぬ　帆雨
ふくろうと水際ゝて如何さ　一散
鈴の音は小坂信ふ彼の哭　秦丘
青柳やをはら細くと結しさすの　徐坡
をはらく鵲や汐の来ぬ雪と後ひ　百瓢
まと向日へ出お秋を気し朽の月　亭来
さ信ひ志花をや花く嫁はら信衣　聴琴
花有仕く月かゝく落流るの外　秋琴

京ま信たとをはちて結ぎし風の音　伊賀　呼秋
消えさそ寄花登とも捨るぬ　左琴
出さあら花戸と押て重也雨に　双鶯
笑の葉やけ日らくく色の上　吉風
二葉よく白ひ引つ掛やちたるし　讃岐　木長
咲くる秋や落葉花白ふつつ鬼　探水
花ふけてぬとん信ぐし　東山　茂梅

国立国会図書館　タイトル『伝春集』　請求記号 863-154
ガラス使用

長月や　名草郷にかちまちさかりぬ　伊勢　笑人

森も関ともうかうや竹のこゑ　映門

明のつらきの関守も咲ちる雲花られ　蓬笠

朝降とひるはくおいとまの時よ夕かな　河内　嘉泉

松葉より名残惜しさに蓑のきぬ　覚係

ころの枝葉も薦の露ふるちょうのふ　万泉

浮雲や蓑笠へ菅れもうちとち　肥台　三孝

神沢や芦の葉に月夜曲突のうら　淡路　吾雨

うきふしの下におもしれ大沢哉　羊谷

秋深して水ある落葉かされ　路池

つゆしもて水路もとふく初かしし　蒋池

のこる堤れ井と明けて出る月ながめ　希康

川先の風呂旅にぬあしのこゑ　筑前　斗丈

ふかき夜は明くる静かな木の花香　宇遠

内の月さるもとり得は菜花蕣　筑后　山公

鍬取て夕陽つゝる山家の中　備中　香雨

花とちくちも兄すてる月明り　浩亭

むくり森の宮ほとゝぬ永新　肥前　竹雲

芝ゝ付もそなくてゝや川やしる　南舊

鳰やをつしゃぬ山花わけ　砂喜

水の流る岡とうすまちる夕納涼　悠々

猫子北明て色え此あさるれこ黎　日向　雙鳥

眼まうんそく飛たゝれの初花　景声

門ふとり川ぬき寸ひつく牡丹かな　薩广　波文

むとまうれるれぬまるむ若葉うな　但馬　松翁

晴手印や五月雲のうへ　大和　茶

涼花渡とつまりつゝる杉うな　丹后　李芝

春風や来る春の若菜やしら鷺　摂ナ　卜叢

飛こさぬ蝶さし花にまれ都の雨　笠村

ちるさくら花の顔しれ咲るの絵　丹波　九義

さくら折てもえる花とて住来の事　月樵

梅の香や掃出し花をとも東かり　蝸角

鶯の音やとふかもらぬ家に度　野卯

折まくる岩根をそれよる芹の露　秋窓女

歌かれし休んでまゐるさぬきこころ　菊泥

五條の川ゆうけ寒し秋の暮　耕雪

打様や優子了ふる雨の街　一茶

世の秋に思ひあらねば子供かな　如夢

炯ちらやうきんあかし花大きなる　湧澂

蔦の根をまれくいろいふ風　伏見　岳風

そよくるくる川や宿まで付編笠　鶯語

行くはるく御ふるしやうめの帰　碩鼓 栄叟

音ひらく也せうに流れけり杜若　今松 芦風

蛍北ふきしにとなし渡りけり庭　明良

切手からはちてあやめ免ちかゝる令　若狭 草蓋

たち帰るぬかとも花蔵松や奥の院　丶

はしなうおつきにひぬむしの声　梅戸呂

末枯や蘓鉄のさらにえ乏しく涼　儀山

吹きこし後の月や名もなく川原　左海 斐雨

桐の葉やりゆけ北吹まかしそめて　魯岳

つゆ帆のことけぞやまし行き出すみ　旦松

梅本すうらしるにふましし望月捨　拾象

竹さむし大工ぞひや水仙花　代丈

埋もれ花ちりはわぬ木のうらや出星　京 漣翁

蔵を俵ん見えし御北 桜の中　呉公

志ら／＼や寒きさえゆく松のうち　魯堂

忘るゝな花は散ゆく行つまり中　可大

山桑に花の雲よりかむもろくち哉　完和

居残りしの春はたゞぬなゝの月　碩水

花の朝やいふものゝ雲おし渡　西馬

見付る可大方角や二日つゞき　石介

帷子や芝生の上の袖さへ見　丁北

野よりいつけしやうなる梅の花　鳳河

一つ影七人見ゆるや春の夜　能登　鳳竹

盆よりやうおしつゝや萩の花に　呂鳳

是からは謡ふもいゝあゝしたらな　紀伊　宗耶

黄昏の静なる庭はあまりかれ　常陸　野巣

時くらき明るともつて春つくる　陸奥　多代女

みな明や水の音しなかさはるゝ　下毛　三千旋

登れ端の灯屋にかゝし梅の和　肥前　蘆山

引く浪は霧にも大根や盛りつけ　石見　菩休

国立国会図書館　タイトル『伝春集』　請求記号 863-154

ガラス使用

神ならぬ身ハまかせたる雪　丈　寥
はなれて新茶の多きに廉なり　祭　魚
柿の粉ふきからして中つまづく　寥
木陰よりあがれて尾張つたふる　魚
はつさりと茶漬すゝめる芸者月　寥
猫喰炭屋守娘の衣つく　魚

物鋤とおしてゆうばへすのこ早　寥
はちあたり寄せてあれは低　魚
見え素れ紅絹のちりもとを掘る　寥
呼れはいらぬもれ空ふ　魚
十月のふうれ十月のあれ寒さ　寥
待ちての涼れ浮きたらぬ春　魚
桂近き小町とも土佐ぬ恐ぬ姿　寥
咲くまでおとはゝうきすりめ　法　魚

やさしくて鰻の喰れもつらして　案
川原なりけく足ぬらす法り　魚
きらくなる奇特の中に花の莚　案
ぬる娘し月のうつ法荒杖　魚
長れ嵩寄れ今猶とりの合せ　、
おもしろう事なお三味せんとさく　案
京菓子など宴して見るをなつかしく　魚
鮑賣る子ありうらもちまて居る　案

包相おもはぬ濱千れ日傘うるふ　魚
きらく咲く翠る楠の輪　案
ちらかりし鬘や鏡とよし越える　魚
掃よせておく米れさんせん　案
手紙ぬいく笹舟の溜るいさり松　魚
秋のうつきけしとけら陀羅尼爭　案
三日月のへてとしはえぬ雲残す　魚
おりしほのひと以色れ初七出れ　案

国立国会図書館　タイトル『伝春集』　請求記号 863-154
ガラス使用

吹ちらして吹ちらしつる声の中　魚

打傾る文字不武家の軒口　案

くるみの味噌もとりけ浴ひて　魚

茶杓ハ割る竹紙えて乗く　案

境内のさ桜をはなまし咲接ひ　魚

鄙らつ音れこゝる窗を深めく　案

右

本復する芝しく放ぬ雲の峰　禾明

蝉くして法らひと嗚るなる蝶　梁魚

於て放衆おとる人見ふ橋座て　有節

ハ備ぞまで流るれてらく　明

抱前れ麻も来つみ月の吹　魚

さらまし宮前る紫藤れ曳ゆ　節

抜ひ居るえよし伐絵の袂あまりし　明

夏ねし子等はものは眠くやさ　魚

別まつる人は出合す夕菜汁　節

操る植木有り神楽さうし　明

出京は仰まる小路有り縁しく　魚

手時らし俺る見え居の声　節

まず月有り廬うろく我袂冷て　明

りくく秘蔵の色く水けく　魚

古家に籠に家我老て佗鉄　節

又紀居つらり藻汐椿居に　明

行ち幹の別るる花ぬらつきりと　魚

春ら霞うつり我あくつる山　節

常有し無せる危をこけらつる　明

行つ我えし紀やのまふあし　魚

お信我庵は恨るそくらくひ　節

捨る花の子も下は有り有る悲　明

浴水もつりおきれ皐月雨　魚

ふつ陽く薪どもき告て来る　茆

能惜れきえてハとはる数本試　明

彩菊しなてく眺りむ〳〵える　魚

さ紀猶て衛の足音きゝくゝ之　茆

迎ひの傘れ杉そよ雪降　明

牡蠣亦の湯産もつれそく月入て　魚

はらら虫はく時雨の夢　茆

辞宜行てく捻念仏の席もとまり　明

君ん膳傾つく床のとうてゝく　魚

追くくま射場つゝ陽る若人まゝま　茆

おつさえさつらひて花なめる之　明

古き之急かうれてきうる春のうち　魚

長閑祭かし並つし梅咲れ峰く　茆

右

極上紙らみとし易く東寒う殺　梅室
ひとり侭月のきらよ　門　綱　条魚
提灯にあれ出て之寸寒うけく　等明
まうらくうちふゑうる涼しやむ　室
様てゆるかち橋　答とうつまなみ　魚
ゑようれ流らく　垂玉　の　涼　明

蕣の手元さるれ　あかき蕣中内　室
呉をれなしぬ　伽羅仏の佇　魚
両掛の風　具おくるし　倭ゆらん　明
小よし内　旅花まさ出来ぬ　韵　室
写くまれ壁会ふいふぬそひ病　魚
倚て　盛所ゆ筏　うくる　繞　壺　明
三日月をあむちるあく　収まらく　室
転うめ子あまふ　度に　藍　深　魚

国立国会図書館　タイトル『伝春集』 請求記号 863-154
ガラス使用

ゑんし咲けし獄ると作山人の氣り　明

草のうちさとと投に今やは　宝

ち原花にふさ追ひゆ此流るゝ不　魚

投さる笑けしうつる楊哉　明

右

田ゝ粉ハと縮つくむかしの盆の月　筑お　那竹

木戸明るのとうや小麦に植木物　和風

是まゝ花さくも此時にや斧の音　ゑ中支　梅竟

洲に行つく露あり又其若菜うれ　小仲支　梅明

杜若の咲さるつぼけりきれてゆく哉　楚三

暮くや花袋のうけの掃除もん　越お　松菊

田の名は此いつりよて折りせず　長門　峯右

ふりつゝむ薮よき行く五月雨　丹波　扨人

国立国会図書館　タイトル『伝春集』 請求記号 863-154

ガラス使用

うへつ笋ぬしくみを二つ三つ　肥前 楊泉
きし島の端まく居るや天の川　鄰芝
色そろしの障子に折る小萩哉　松匡
かし結ひまつや五月のふる雨　木二
影ぬ蓼られこゝろへて雲の糸　眉山
箆より内くち吹るに春のかせ　竹友
夕時雨髪へのふしこて晴よかり　松青
本堂の灯を消て折りや雪の鶴　希静

跋

先年梅隠翁と生涯句草の一葉に
あそひて俳諧の道は其道
たまひぬるを慕ひの其くをしや
ひそふる文恵しられて二を枝あの
うしいつねもこゝろに小絆忘をいと
ふみそめて流風子の手習子を
まふろせうるゝにきこえしるを

国立国会図書館　タイトル『伝春集』　請求記号 863-154
ガラス使用

はなやまに拾ひあつめて伝春集と
なん名つくるなり然れるはて
わりはるゝさうさあしひきれ
おりから雪舟に筆をつゝひく
咲そむる梅の秋本の翁に
このひとくそへてかくらあそしみ
あしかはみやひを残りて
雲をなくさむるかのみの

むしの糸紙のたくひよろたいつ次
いみしきさまをやいそんと師
そよしを孫ありてつけよろしく
かいつくはてとこのを

ふ花楼
桂存園手明

国立国会図書館　タイトル『伝春集』　請求記号 863-154
ガラス使用

863
154

14261

枯魚堂藏板

国立国会図書館　タイトル『伝春集』　請求記号 863-154
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伝春集』 請求記号 863-154
ガラス使用